

女とおんな。

——白い微笑み、黒い本音——

第1話～第12話 書籍版

登場人物

田中美咲 清楚で人当たりがよく、二人の男子から想いを寄せられる少女。人に愛されることを強く求めながら、その欲望を自分でも認めきれない。

高橋健太 明るく行動力があり、裕福な家庭で育った少年。美咲を守ろうとするが、その『守る』と

いう姿勢そのものを問い直していく。

佐藤裕太 真面目で繊細。相手の言葉の裏側を考える少年。美咲を疑うことで真実へ近づく一方、自分の疑念にも向き合う。

小泉亜紀 美咲の中学時代を知る少女。過去を現在へ持ち込み、美

咲の『白い微笑み』に亀裂を入れる。

神崎玲奈 石井翔太の元恋人。美咲に『奪われた女』として現れるが、自分自身の嫉妬と責任も認めていく。

長谷川直樹 中学時代、美咲をめぐって友情を失った当事者の一人。

石井翔太 中学時代のもう一人の
当事者。現在の健太と裕太へ警告
を送る。

桐生圭介 高校入学後の美咲と
会っていた年上の男。美咲が初め
て自分の責任を認めるきっかけと
なる。

目次

第1話 桜の下で、彼女は二人を
選んだ

第2話 二人だけの秘密

第3話 放課後の約束

第4話 日曜日の罟

第5話 初めての嘘

第6話 同じ場所に呼ばれた二人

第7話 文化祭実行委員

第8話 過去を知る女

第9話 最初の反撃

第10話 写真

第11話 奪った女、奪われた女

第12話 守る男、疑う男

書籍版あとがき

第1話 桜の下で、彼女は二人を選んだ



四月の朝、校門へ続く坂道には桜が降っていた。田中美咲は、新しい制服の袖口を指で整えながら、人の流れを眺めていた。高校生活が始まる。その事実よりも、誰と出会い、誰にどう見られるか

のほうが、彼女にはずっと現実的だった。

しばらくして、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

その日のことを思い返すと、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の配置だけが少しずつ変わっていく。

言葉にしないまま、美咲は、人から見られている自分と、自分だ

けが知っている自分の間に薄い膜があるように感じていた。笑えば笑うほど、その膜はきれいに見える。そして、きれいなものほど破れる時の音は大きい。

高橋健太は人の輪の中心にいる少年だった。笑う声が大きく、初対面の相手にもためらいなく話しかける。佐藤裕太はその半歩後ろ

にいた。目立たないのではない。

周囲をよく見てから言葉を選ぶ人間だった。二人は中学からの親友だった。

その日のことを思い返すと、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の

配置だけが少しずつ変わっていく。

言葉にしないまま、美咲は、人から見られている自分と、自分だけが知っている自分の間に薄い膜があるように感じていた。笑えば笑うほど、その膜はきれいに見える。そして、きれいなものほど破れる時の音は大きい。

誰にも見えないところで、健太は考えるより先に動く人間だった。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

＊

美咲が落とした生徒手帳を拾ったのは健太だった。『これ、君の？』。その声に美咲が振り返る。健太の横で裕太も彼女を見た。ほんの数秒だった。それでも三人の間には、後から思い返せば始まりと呼ぶしかない沈黙が生まれた。

言葉にしないまま、美咲は、人から見られている自分と、自分だけが知っている自分の間に薄い膜があるように感じていた。笑えば笑うほど、その膜はきれいに見える。そして、きれいなものほど破れる時の音は大きい。

誰にも見えないところで、健太は考えるより先に動く人間だっ

た。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

けれど同時に、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも

彼は、分からないものを分かった
ふりだけはしたくなかった。

美咲は二人に同じ笑顔を向けた。しかし心の中では、もう違いを見ていた。健太には頼もしさがある。裕太には話を聞いてくれそうな静けさがある。どちらが好きかではなかった。どちらという自

分が心地よいか。それを確かめた
かった。

誰にも見えないところで、健太
は考えるより先に動く人間だっ
た。だからこそ、立ち止まった時
の迷いは深かった。守りたいとい
う気持ちは本物だ。それでも、守
ることが相手を見ないことに変わ
る瞬間がある。

けれど同時に、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分かったふりだけはしたくなかった。

それでも、三人ともまだ高校生だった。恋を知っているつもりで、実際には自分の欲望の名前すら知らない。だから傷つけ、傷つ

き、そのたびに相手のせいにならなかった。

＊

放課後、三人は偶然同じ桜並木を歩いた。健太は冗談を言い、美咲を笑わせた。裕太は彼女が風で髪を押さえる仕草を見て、歩く速度を少し落とした。美咲はその両方に気づいていた。

けれど同時に、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分かったふりだけはしたくなかった。

それでも、三人ともまだ高校生だった。恋を知っているつもりで、実際には自分の欲望の名前すら知らない。だから傷つけ、傷つ

き、そのたびに相手のせいにした
くなった。

翌日の光の中では、人は秘密を
持った瞬間に変わるのではない。
秘密を守るために次の言葉を選ん
だ瞬間から、少しずつ変わってい
くのだ。

その夜、美咲は健太へ『今日は
ありがとう。頼りになるね』と送

り、裕太へは『佐藤くんって、なんだか話しやすい』と送った。二人とも、その一文を何度も読み返した。

それでも、三人ともまだ高校生だった。恋を知っているつもりで、実際には自分の欲望の名前すら知らない。だから傷つけ、傷つ

き、そのたびに相手のせいにした
くなった。

翌日の光の中では、人は秘密を
持った瞬間に変わるのではない。
秘密を守るために次の言葉を選ん
だ瞬間から、少しずつ変わってい
くのだ。

帰り道になってから、美咲は鏡
を見る時、自分の顔より表情を確

かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

＊

美咲はベッドの上でスマートフォンを伏せた。胸が少し高鳴っていた。二人を騙そうと思ったわ

けではない。ただ、二つの好意が
自分へ向かってくる感覚が、思っ
た以上に心地よかった。

翌日の光の中では、人は秘密を
持った瞬間に変わるのではない。
秘密を守るために次の言葉を選ん
だ瞬間から、少しずつ変わってい
くのだ。

帰り道になってから、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

しばらくして、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁

だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

桜はまだ満開だった。三人は知らなかった。花が散るより先に、親友という言葉の意味が少しずつ変わり始めることを。

帰り道になってから、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

しばらくして、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁

だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

その日のことを思い返すと、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の

配置だけが少しずつ変わって
いく。

第2話 二人だけの秘密



美咲は健太には明るい自分を見せた。昼休み、購買へ走る健太に笑いながらついていき、『健太くんといると退屈しない』と言った。その言葉は健太にとって告白に近い意味を持った。

その日のことを思い返すと、健太は考えるより先に動く人間だった。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

言葉にしないまま、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何

も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分かったふりだけはしたくなかった。

誰にも見えないところで、三人ともまだ高校生だった。恋を知っているつもりで、実際には自分の欲望の名前すら知らない。だから

傷つけ、傷つき、そのたびに相手のせいにしたくなった。

一方、裕太と二人になった図書室では、美咲は声を落とした。

『私、人が多いところって少し疲れるんだ』。裕太は驚いた。健太の前で笑う彼女しか知らなかったからだ。

言葉にしないまま、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分かったふりだけはしたくなかった。

誰にも見えないところで、三人ともまだ高校生だった。恋を知っているつもりで、実際には自分の

欲望の名前すら知らない。だから
傷つけ、傷つき、そのたびに相手
のせいにしたくなった。

けれど同時に、人は秘密を持っ
た瞬間に変わるのではない。秘密
を守るために次の言葉を選んだ瞬
間から、少しずつ変わっていくの
だ。

＊

『これ、健太くんには言わないでね』。美咲がそう付け加えた瞬間、裕太の中に小さな優越感が生まれた。秘密を共有することは、距離を縮める最も簡単な方法だった。

誰にも見えないところで、三人ともまだ高校生だった。恋を知っているつもりで、実際には自分の

欲望の名前すら知らない。だから
傷つけ、傷つき、そのたびに相手
のせいにしたくなった。

けれど同時に、人は秘密を持っ
た瞬間に変わるのではない。秘密
を守るために次の言葉を選んだ瞬
間から、少しずつ変わっていくの
だ。

それでも、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

健太もまた、美咲から別の秘密を受け取っていた。『裕太くんにはまだ言っていないけど、今度の日

曜、駅前のお店に行ってみたいんだ』。誰にも言わない約束が、二人の少年に別々に渡された。

けれど同時に、人は秘密を持った瞬間に変わるのではない。秘密を守るために次の言葉を選んだ瞬間から、少しずつ変わっていくのだ。

それでも、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

翌日の光の中では、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁だった。誰もが自分の正しさ

を持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

＊

親友同士の会話から、美咲の名前だけが不自然に消え始めた。以前なら何でも話した。ところが今は、互いに一番話したいことほど言えない。

それでも、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

翌日の光の中では、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁だった。誰もが自分の正しさ

を持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

帰り道になってから、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の配置だけが少しずつ変わっていく。

美咲はその変化を敏感に感じていた。そして、止めなかった。自分が二人の間にいることを確認するたび、胸の奥の空白が少しだけ埋まった。

翌日の光の中では、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関

係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

帰り道になってから、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の配置だけが少しずつ変わっていく。

しばらくして、美咲は、人から
見られている自分と、自分だけが
知っている自分の間に薄い膜があ
るように感じていた。笑えば笑う
ほど、その膜はきれいに見える。
そして、きれいなものほど破れる
時の音は大きい。

＊

彼女はまだ、それを支配欲とは
呼ばなかった。愛されたいだけだ
と思っていた。

帰り道になってから、窓の外で
は、季節だけが何事もなかったよ
うに進んでいた。教室のざわめ
き、電車の音、夕方の風。日常は
変わらないのに、心の中の配置だ
けが少しずつ変わっていく。

しばらくして、美咲は、人から見られている自分と、自分だけが知っている自分の間に薄い膜があるように感じていた。笑えば笑うほど、その膜はきれいに見える。そして、きれいなものほど破れる時の音は大きい。

その日のことを思い返すと、健太は考えるより先に動く人間だっ

た。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

第3話 放課後の約束



金曜日の放課後、美咲は健太を廊下で呼び止めた。『日曜日、暇？』。健太は返事を急ぎすぎないようにしながら、『まあ、空いてる』と答えた。

言葉にしないまま、人は秘密を持った瞬間に変わるのではない。

秘密を守るために次の言葉を選んだ瞬間から、少しずつ変わっていくのだ。

誰にも見えないところで、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始

まったのか、彼女自身にも分からなかった。

けれど同時に、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

駅前の新しいカフェへ行く約束が決まった。健太は帰宅してから服を三度選び直した。これはデートなのか。そう考えるたび、顔が緩んだ。

誰にも見えないところで、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎ

ないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

けれど同時に、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

それでも、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の配置だけが少しずつ変わっていく。

＊

同じ日の夕方、美咲は裕太にも声をかけた。『日曜の夜、電話し

てもいい?』。裕太は理由を聞か
なかった。美咲が自分を必要とし
ている。それだけで十分だった。

けれど同時に、その言葉のあと
に残った沈黙は、返事よりも雄弁
だった。誰もが自分の正しさを
持っている。けれど、三人の関係
では、正しさがいつも誰かを救う
とは限らなかった。

それでも、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の配置だけが少しずつ変わっていく。

翌日の光の中では、美咲は、人から見られている自分と、自分だけが知っている自分の間に薄い膜

があるように感じていた。笑えば
笑うほど、その膜はきれいに見え
る。そして、きれいなもののほど破
れる時の音は大きい。

一つの日曜日が、二人に別々の
期待を与えた。健太は昼を待ち、
裕太は夜を待った。

それでも、窓の外では、季節だ
けが何事もなかったように進んで

いた。教室のざわめき、電車の音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の配置だけが少しずつ変わっていく。

翌日の光の中では、美咲は、人から見られている自分と、自分だけが知っている自分の間に薄い膜があるように感じていた。笑えば笑うほど、その膜はきれいに見え

る。そして、きれいなもののほど破れる時の音は大きい。

帰り道になってから、健太は考えるより先に動く人間だった。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

＊

美咲は予定表を眺めた。昼は健太。夜は裕太。罪悪感より先に、うまく収まったという安堵があった。

翌日の光の中では、美咲は、人から見られている自分と、自分だけが知っている自分の間に薄い膜があるように感じていた。笑えば

笑うほど、その膜はきれいに見える。そして、きれいなもののほど破れる時の音は大きい。

帰り道になってから、健太は考えるより先に動く人間だった。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守ること

が相手を見ないことに変わる瞬間がある。

しばらくして、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分かったふりだけはしたくなかった。

だが、約束は人を近づけるだけではない。誰かとの約束を隠した

瞬間、それは別の誰かとの距離を作る。

帰り道になってから、健太は考えるより先に動く人間だった。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

しばらくして、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分かったふりだけはしたくなかった。

その日のことを思い返すと、三人ともまだ高校生だった。恋を知っているつもりで、実際には自分の欲望の名前すら知らない。だ

から傷つけ、傷つき、そのたびに
相手のせいにしたくなった。

第4話 日曜日の罨



日曜の午後、健太と美咲は駅前を歩いた。美咲はいつもより少しだけ大人っぽい服を選んでいて、健太は褒めるタイミングを逃し、結局カフェへ入ってから『今日、なんか雰囲気違うな』と言った。

誰にも見えないところで、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の配置だけが少しずつ変わっていく。

けれど同時に、美咲は、人から見られている自分と、自分だけが知っている自分の間に薄い膜があ

るように感じていた。笑えば笑う
ほど、その膜はきれいに見える。
そして、きれいなもののほど破れる
時の音は大きい。

それでも、健太は考えるより先
に動く人間だった。だからこそ、
立ち止まった時の迷いは深かつ
た。守りたいという気持ちは本物

だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

『変？』 『逆。似合ってる』。

美咲は笑った。その笑顔を見て、健太は今日が特別な日だと確信した。

けれど同時に、美咲は、人から見られている自分と、自分だけが知っている自分の間に薄い膜があ

るように感じていた。笑えば笑う
ほど、その膜はきれいに見える。
そして、きれいなものほど破れる
時の音は大きい。

それでも、健太は考えるより先
に動く人間だった。だからこそ、
立ち止まった時の迷いは深かつ
た。守りたいという気持ちは本物

だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

翌日の光の中では、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分かったふりだけはしたくなかった。

＊

夕方、別れ際に美咲は『今日のこと、裕太くんには言わなくていいよ』と言った。健太は理由を尋ねた。『変に気を遣わせたくないから』。もっともらしい説明だった。

それでも、健太は考えるより先に動く人間だった。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かつ

た。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

翌日の光の中では、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分かったふりだけはしたくなかった。

帰り道になってから、三人ともまだ高校生だった。恋を知っているつもりで、実際には自分の欲望の名前すら知らない。だから傷つけ、傷つき、そのたびに相手のせいにしたくなった。

夜、美咲は約束通り裕太へ電話した。声は昼間より弱かった。

『今日ね、ちょっと疲れた』。裕

太は何があったのか聞いたが、美咲は『大したことじゃない』と答えた。

翌日の光の中では、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分かったふりだけはしたくなかった。

帰り道になってから、三人ともまだ高校生だった。恋を知っているつもりで、実際には自分の欲望の名前すら知らない。だから傷つけ、傷つき、そのたびに相手のせいにしたくなった。

しばらくして、人は秘密を持った瞬間に変わるのではない。秘密を守るために次の言葉を選んだ瞬

間から、少しずつ変わっていくのだ。

＊

裕太は一時間近く話を聞いた。
電話を切る直前、美咲は『裕太く
んに話すと落ち着く』と言った。

帰り道になってから、三人とも
まだ高校生だった。恋を知ってい
るつもりで、実際には自分の欲望

の名前すら知らない。だから傷つけ、傷つき、そのたびに相手のせいにしたくなった。

しばらくして、人は秘密を持った瞬間に変わるのではない。秘密を守るために次の言葉を選んだ瞬間から、少しずつ変わっていくのだ。

その日のことを思い返すと、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

昼に選ばれた健太。夜に必要とされた裕太。二人とも、自分だけが触れた美咲の顔を信じた。

しばらくして、人は秘密を持った瞬間に変わるのではない。秘密を守るために次の言葉を選んだ瞬間から、少しずつ変わっていくのだ。

その日のことを思い返すと、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

言葉にしないまま、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも

雄弁だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

＊

美咲は眠る前、二人との履歴を見比べた。自分でも理由の分らない満足感があった。その満足感こそが、最初の罠だった。

その日のことを思い返すと、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

言葉にしないまま、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも

雄弁だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

誰にも見えないところで、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の音、夕方の風。日常

は変わらないのに、心の中の配置
だけが少しずつ変わっていく。

第5話 初めての嘘



月曜日。裕太は何気なく健太へ日曜のことを聞いた。『昨日、何してた?』。健太は一瞬だけ間を置き、『家にいた』と答えた。

けれど同時に、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも

彼は、分からないものを分かった
ふりだけはしたくなかった。

それでも、三人ともまだ高校生
だった。恋を知っているつもり
で、実際には自分の欲望の名前す
ら知らない。だから傷つけ、傷つ
き、そのたびに相手のせいにした
くなった。

翌日の光の中では、人は秘密を
持った瞬間に変わるのではない。
秘密を守るために次の言葉を選ん
だ瞬間から、少しずつ変わってい
くのだ。

その短い嘘を、裕太は見逃さな
かった。健太は嘘が下手だった。
目線がわずかに泳ぐ。

それでも、三人ともまだ高校生
だった。恋を知っているつもり
で、実際には自分の欲望の名前す
ら知らない。だから傷つけ、傷つ
き、そのたびに相手のせいにした
くなった。

翌日の光の中では、人は秘密を
持った瞬間に変わるのではない。
秘密を守るために次の言葉を選ん

だ瞬間から、少しずつ変わっていくのだ。

帰り道になってから、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

＊

健太もまた、裕太のスマートフォンに美咲からの着信履歴があることに気づいた。『昨日、誰かと長電話してた？』『別に』。今度は裕太が嘘をついた。

翌日の光の中では、人は秘密を持った瞬間に変わるのではない。秘密を守るために次の言葉を選ん

だ瞬間から、少しずつ変わっていくのだ。

帰り道になってから、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

しばらくして、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

二人は互いの嘘を知りながら、指摘しなかった。親友だからこ

そ、聞けないことが生まれていた。

帰り道になってから、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

しばらくして、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

その日のことを思い返すと、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室の

ざわめき、電車の音、夕方の風。

日常は変わらないのに、心の中の
配置だけが少しずつ変わってい
く。

＊

美咲は昼休み、二人の間に座っ
た。以前なら自然に続いた会話が
途切れる。『どうしたの？』と尋
ねる美咲の声には、本当の心配

と、わずかな確認が混ざっていた。

しばらくして、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

その日のことを思い返すと、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の配置だけが少しずつ変わっていく。

言葉にしないまま、美咲は、人から見られている自分と、自分だ

けが知っている自分の間に薄い膜があるように感じていた。笑えば笑うほど、その膜はきれいに見える。そして、きれいなものほど破れる時の音は大きい。

その夜、美咲は自分が原因だと分かっていた。それでも二人に同じ言葉を送った。『今日は元気なかったね。大丈夫？』。

その日のことを思い返すと、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の配置だけが少しずつ変わっていく。

言葉にしないまま、美咲は、人から見られている自分と、自分だ

けが知っている自分の間に薄い膜があるように感じていた。笑えば笑うほど、その膜はきれいに見える。そして、きれいなものほど破れる時の音は大きい。

誰にも見えないところで、健太は考えるより先に動く人間だった。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいとい

う気持ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

＊

二人はそれぞれ、『自分だけを心配してくれた』と思った。嘘は一度つくと、次の嘘を必要とする。三人の関係は、静かにその段階へ入った。

言葉にしないまま、美咲は、人から見られている自分と、自分だけが知っている自分の間に薄い膜があるように感じていた。笑えば笑うほど、その膜はきれいに見える。そして、きれいなものほど破れる時の音は大きい。

誰にも見えないところで、健太は考えるより先に動く人間だっ

た。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

けれど同時に、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも

彼は、分からないものを分かった
ふりだけはしたくなかった。

第6話 同じ場所に呼ばれた 二人



火曜日、美咲は健太へ『放課後、音楽室に来て』と送り、少し時間を置いて裕太にも同じ文面を送った。二人とも、自分だけが呼ばれたと思った。

それでも、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

翌日の光の中では、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁だった。誰もが自分の正しさ

を持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

帰り道になってから、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の配置だけが少しずつ変わっていく。

放課後。音楽室の前で、健太と裕太は鉢合わせした。『何でお前がいるんだよ』『美咲に呼ばれた』。答えは同じだった。

翌日の光の中では、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関

係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

帰り道になってから、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の配置だけが少しずつ変わっていく。

しばらくして、美咲は、人から
見られている自分と、自分だけが
知っている自分の間に薄い膜があ
るように感じていた。笑えば笑う
ほど、その膜はきれいに見える。
そして、きれいなものほど破れる
時の音は大きい。

＊

美咲は遅れて現れた。驚いた顔を作る必要はなかった。二人の表情を見た瞬間、本当に胸が痛んだからだ。

帰り道になってから、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の音、夕方の風。日常は

変わらないのに、心の中の配置だけが少しずつ変わっていく。

しばらくして、美咲は、人から見られている自分と、自分だけが知っている自分の間に薄い膜があるように感じていた。笑えば笑うほど、その膜はきれいに見える。そして、きれいなものほど破れる時の音は大きい。

その日のことを思い返すと、健太は考えるより先に動く人間だった。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

その日の帰り道、抑えていた言葉がついに出た。健太が言った。

『俺は美咲が好きだ』。裕太も逃げなかった。『俺も好きだよ』。

しばらくして、美咲は、人から見られている自分と、自分だけが知っている自分の間に薄い膜があるように感じていた。笑えば笑うほど、その膜はきれいに見える。そして、きれいなものほど破れる時の音は大きい。

その日のことを思い返すと、健太は考えるより先に動く人間だった。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

言葉にしないまま、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何

も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分かったふりだけはしたくなかった。

＊

少し離れた場所で、美咲はその告白を聞いていた。嬉しいはずなのに、身体の奥が冷たくなった。

自分が望んだ形が、現実になると怖かった。

その日のことを思い返すと、健太は考えるより先に動く人間だった。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

言葉にしないまま、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分かったふりだけはしたくなかった。

誰にも見えないところで、三人ともまだ高校生だった。恋を知っているつもりで、実際には自分の

欲望の名前すら知らない。だから
傷つけ、傷つき、そのたびに相手の
のせいにしたくなった。

夜、美咲は健太へ『信じてる』
と送り、裕太へ『本音を言えるの
は裕太くん』と送った。

言葉にしないまま、裕太は言葉
を選ぶ癖があった。選びすぎて何
も言えなくなることもある。それ

でも彼は、分からないものを分か
ったふりだけはしたくなかつ
た。

誰にも見えないところで、三人
ともまだ高校生だった。恋を知っ
ているつもりで、実際には自分の
欲望の名前すら知らない。だから
傷つけ、傷つき、そのたびに相手
のせいにしたくなった。

けれど同時に、人は秘密を持った瞬間に変わるのではない。秘密を守るために次の言葉を選んだ瞬間から、少しずつ変わっていくのだ。

＊

翌朝から二人の友情には目に見えない距離ができた。美咲は成功したと思った。同時に、成功とい

う言葉を使った自分に少しだけ怯えた。

誰にも見えないところで、三人ともまだ高校生だった。恋を知っているつもりで、実際には自分の欲望の名前すら知らない。だから傷つけ、傷つき、そのたびに相手のせいにしたくなった。

けれど同時に、人は秘密を持った瞬間に変わるのではない。秘密を守るために次の言葉を選んだ瞬間から、少しずつ変わっていくのだ。

それでも、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習

慣がいつから始まったのか、彼女
自身にも分からなかった。

第7話 文化祭実行委員



文化祭の実行委員を決める日、
美咲が手を挙げた。健太も続き、
少し遅れて裕太も手を挙げた。教
室から笑いが起きた。三人はまた
同じ場所に集まった。

翌日の光の中では、美咲は、人
から見られている自分と、自分だ

けが知っている自分の間に薄い膜があるように感じていた。笑えば笑うほど、その膜はきれいに見える。そして、きれいなものほど破れる時の音は大きい。

帰り道になってから、健太は考えるより先に動く人間だった。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持

ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

しばらくして、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分かったふりだけはしたくなかった。

その日のことを思い返すと、三人ともまだ高校生だった。恋を知っているつもりで、実際には自分の欲望の名前すら知らない。だから傷つけ、傷つき、そのたびに相手のせいにしたくなった。

企画は脱出型の謎解きに決まった。健太は人を動かし、裕太は問

題を作り、美咲は全体を調整した。役割は驚くほど噛み合った。

帰り道になってから、健太は考えるより先に動く人間だった。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

しばらくして、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分かったふりだけはしたくなかった。

その日のことを思い返すと、三人ともまだ高校生だった。恋を知っているつもりで、実際には自分の欲望の名前すら知らない。だ

から傷つけ、傷つき、そのたびに
相手のせいにしたくなった。

言葉にしないまま、人は秘密を
持った瞬間に変わるのではない。
秘密を守るために次の言葉を選ん
だ瞬間から、少しずつ変わってい
くのだ。

＊

準備が進むほど、三人は普通の友達のように戻った。しかし、ふとした瞬間に競争が顔を出す。美咲が健太を褒めれば裕太は黙り、美咲が裕太へ相談すれば健太の声が大きくなる。

しばらくして、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも

彼は、分からないものを分かった
ふりだけはしたくなかった。

その日のことを思い返すと、三
人ともまだ高校生だった。恋を
知っているつもりで、実際には自
分の欲望の名前すら知らない。だ
から傷つけ、傷つき、そのたびに
相手のせいにしたくなった。

言葉にしないまま、人は秘密を
持った瞬間に変わるのではない。
秘密を守るために次の言葉を選ん
だ瞬間から、少しずつ変わってい
くのだ。

誰にも見えないところで、美咲
は鏡を見る時、自分の顔より表情
を確かめることがあった。笑えて
いるか。困って見えるか。強すぎ

ないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

そんな三人を廊下の向こうから
見ている女子生徒がいた。小泉亜
紀。美咲の中学時代を知る少女
だった。

その日のことを思い返すと、三
人ともまだ高校生だった。恋を

知っているつもりで、実際には自分の欲望の名前すら知らない。だから傷つけ、傷つき、そのたびに相手のせいにしたくなった。

言葉にしないまま、人は秘密を持った瞬間に変わるのではない。秘密を守るために次の言葉を選んだ瞬間から、少しずつ変わっていくのだ。

誰にも見えないところで、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

けれど同時に、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁

だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

＊

亜紀は美咲へ近づき、『また同じことしてるんだ』と言った。美咲の笑顔が初めて明確に凍った。

言葉にしないまま、人は秘密を
持った瞬間に変わるのではない。
秘密を守るために次の言葉を選ん
だ瞬間から、少しずつ変わってい
くのだ。

誰にも見えないところで、美咲
は鏡を見る時、自分の顔より表情
を確かめることがあった。笑えて
いるか。困って見えるか。強すぎ

ないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

けれど同時に、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

それでも、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の配置だけが少しずつ変わっていく。

健太と裕太には聞こえなかった。しかし美咲だけは知ってい

た。過去が、とうとう高校まで追いついてきたことを。

誰にも見えないところで、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

けれど同時に、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

それでも、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の

音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の配置だけが少しずつ変わっていく。

翌日の光の中では、美咲は、人から見られている自分と、自分だけが知っている自分の間に薄い膜があるように感じていた。笑えば笑うほど、その膜はきれいに見え

る。そして、きれいなもののほど破れる時の音は大きい。

第8話 過去を知る女



亜紀は裕太へ接触した。『美咲のこと、本当に知ってる？』。裕太は警戒したが、その言葉を見做しできなかった。

帰り道になってから、三人ともまだ高校生だった。恋を知っているつもりで、実際には自分の欲望

の名前すら知らない。だから傷つけ、傷つき、そのたびに相手のせいにしたくなった。

しばらくして、人は秘密を持った瞬間に変わるのではない。秘密を守るために次の言葉を選んだ瞬間から、少しずつ変わっていくのだ。

その日のことを思い返すと、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

言葉にしないまま、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも

雄弁だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

中学時代、美咲を好きになった二人の男子がいた。長谷川直樹と石井翔太。二人は親友だった。今の健太と裕太のように。

しばらくして、人は秘密を持った瞬間に変わるのではない。秘密を守るために次の言葉を選んだ瞬間から、少しずつ変わっていくのだ。

その日のことを思い返すと、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強す

ぎないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

言葉にしないまま、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

誰にも見えないところで、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の配置だけが少しずつ変わっていく。

＊

『偶然だと思う？』。亜紀の問いに、裕太は答えられなかった。

その日のことを思い返すと、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

言葉にしないまま、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも

雄弁だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

誰にも見えないところで、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の音、夕方の風。日常

は変わらないのに、心の中の配置
だけが少しずつ変わっていく。

けれど同時に、美咲は、人から
見られている自分と、自分だけが
知っている自分の間に薄い膜があ
るように感じていた。笑えば笑う
ほど、その膜はきれいに見える。
そして、きれいなものほど破れる
時の音は大きい。

美咲は亜紀へ『余計なこと言わないで』と頼んだ。亜紀は笑った。『余計かどうかは、聞く人が決めるんじゃない？』。

言葉にしないまま、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関

係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

誰にも見えないところで、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の配置だけが少しずつ変わっていく。

けれど同時に、美咲は、人から見られている自分と、自分だけが知っている自分の間に薄い膜があるように感じていた。笑えば笑うほど、その膜はきれいに見える。そして、きれいなものほど破れる時の音は大きい。

それでも、健太は考えるより先に動く人間だった。だからこそ、

立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

＊

健太は美咲を守ろうとした。裕太は事実を知ろうとした。二人の違いが、初めてはっきりした。

誰にも見えないところで、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の配置だけが少しずつ変わっていく。

けれど同時に、美咲は、人から見られている自分と、自分だけが知っている自分の間に薄い膜があ

るように感じていた。笑えば笑う
ほど、その膜はきれいに見える。
そして、きれいなもののほど破れる
時の音は大きい。

それでも、健太は考えるより先
に動く人間だった。だからこそ、
立ち止まった時の迷いは深かつ
た。守りたいという気持ちは本物

だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

翌日の光の中では、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分かったふりだけはしたくなかった。

美咲は、自分は過去の喧嘩に巻き込まれたただだと話した。だが亜紀は別の言葉を残した。『美咲は自分から誰かを傷つけない。誰かが美咲のために誰かを傷つけるようにするの』。

けれど同時に、美咲は、人から見られている自分と、自分だけが知っている自分の間に薄い膜があ

るように感じていた。笑えば笑う
ほど、その膜はきれいに見える。
そして、きれいなものほど破れる
時の音は大きい。

それでも、健太は考えるより先
に動く人間だった。だからこそ、
立ち止まった時の迷いは深かつ
た。守りたいという気持ちは本物

だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

翌日の光の中では、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分かったふりだけはしたくなかった。

帰り道になってから、三人ともまだ高校生だった。恋を知っているつもりで、実際には自分の欲望の名前すら知らない。だから傷つけ、傷つき、そのたびに相手のせいにしたくなった。

＊

その夜、裕太は長谷川直樹の名前を検索した。疑いは、形を持ち始めていた。

それでも、健太は考えるより先に動く人間だった。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

翌日の光の中では、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分かったふりだけはしたくなかった。

帰り道になってから、三人ともまだ高校生だった。恋を知っているつもりで、実際には自分の欲望

の名前すら知らない。だから傷つけ、傷つき、そのたびに相手のせいにしたくなった。

しばらくして、人は秘密を持った瞬間に変わるのではない。秘密を守るために次の言葉を選んだ瞬間から、少しずつ変わっていくのだ。

第9話 最初の反撃



裕太は長谷川直樹と連絡を取った。直樹は最初、美咲の話を避けた。しかし裕太が『同じことが起きているかもしれない』と言うと、長い沈黙の後で会うことを承諾した。

しばらくして、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

その日のことを思い返すと、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室の

ざわめき、電車の音、夕方の風。

日常は変わらないのに、心の中の
配置だけが少しずつ変わってい
く。

言葉にしないまま、美咲は、人
から見られている自分と、自分だ
けが知っている自分の間に薄い膜
があるように感じていた。笑えば
笑うほど、その膜はきれいに見え

る。そして、きれいなもののほど破れる時の音は大きい。

誰にも見えないところで、健太は考えるより先に動く人間だった。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

直樹が語ったのは、単純な悪女の物語ではなかった。美咲は弱さを見せ、助けを求め、同時にもう一人の男子について『少し怖い』と話していた。しかも相手を入れ替えながら、似た言葉を使っていた。

その日のことを思い返すと、窓の外では、季節だけが何事もな

かったように進んでいた。教室の
ざわめき、電車の音、夕方の風。
日常は変わらないのに、心の中の
配置だけが少しずつ変わってい
く。

言葉にしないまま、美咲は、人
から見られている自分と、自分だ
けが知っている自分の間に薄い膜
があるように感じていた。笑えば

笑うほど、その膜はきれいに見える。そして、きれいなもののほど破れる時の音は大きい。

誰にも見えないところで、健太は考えるより先に動く人間だった。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守

ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

けれど同時に、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分かったふりだけはしたくなかった。

＊

『俺たちは勝手に正義の味方になった』。直樹はそう言った。

『美咲が命令したわけじゃない。でも、守らなきゃと思わされた』。

言葉にしないまま、美咲は、人から見られている自分と、自分だけが知っている自分の間に薄い膜があるように感じていた。笑えば

笑うほど、その膜はきれいに見える。そして、きれいなもののほど破れる時の音は大きい。

誰にも見えないところで、健太は考えるより先に動く人間だった。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守

ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

けれど同時に、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分かったふりだけはしたくなかった。

それでも、三人ともまだ高校生だった。恋を知っているつもり

で、実際には自分の欲望の名前すら知らない。だから傷つけ、傷つき、そのたびに相手のせいになくなった。

裕太は美咲を責める材料を得たはずだった。ところが帰り道、胸に残ったのは勝利感ではなく不安だった。人はどこまで他人の責任にできるのか。

誰にも見えないところで、健太は考えるより先に動く人間だった。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

けれど同時に、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言

えなくなることもある。それでも
彼は、分からないものを分かった
ふりだけはしたくなかった。

それでも、三人ともまだ高校生
だった。恋を知っているつもり
で、実際には自分の欲望の名前す
ら知らない。だから傷つけ、傷つ
き、そのたびに相手のせいにした
くなった。

翌日の光の中では、人は秘密を
持った瞬間に変わるのではない。
秘密を守るために次の言葉を選ん
だ瞬間から、少しずつ変わってい
くのだ。

＊

一方、美咲も黙ってはいなかつ
た。亜紀へ正面から向き合い、

『私だけを悪者にするなら、あなた
がしたことも話す』と言った。

けれど同時に、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分かったふりだけはしたくなかった。

それでも、三人ともまだ高校生だった。恋を知っているつもり

で、実際には自分の欲望の名前すら知らない。だから傷つけ、傷つき、そのたびに相手のせいになくなった。

翌日の光の中では、人は秘密を持った瞬間に変わるのではない。秘密を守るために次の言葉を選んだ瞬間から、少しずつ変わっていくのだ。

帰り道になってから、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

亜紀の顔色が変わった。過去には、美咲だけではなく亜紀自身の嫉妬や噂も絡んでいた。

それでも、三人ともまだ高校生だった。恋を知っているつもりで、実際には自分の欲望の名前すら知らない。だから傷つけ、傷つき、そのたびに相手のせいにしたくなった。

翌日の光の中では、人は秘密を
持った瞬間に変わるのではない。
秘密を守るために次の言葉を選ん
だ瞬間から、少しずつ変わってい
くのだ。

帰り道になってから、美咲は鏡
を見る時、自分の顔より表情を確
かめることがあった。笑えている
か。困って見えるか。強すぎない

か。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

しばらくして、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

＊

初めて、美咲は追われる側から反撃する側へ回った。だが反撃は真実を消さない。むしろ、隠れていた人物を呼び寄せることになった。

翌日の光の中では、人は秘密を持った瞬間に変わるのではない。秘密を守るために次の言葉を選ん

だ瞬間から、少しずつ変わっていくのだ。

帰り道になってから、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

しばらくして、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

その日のことを思い返すと、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室の

ざわめき、電車の音、夕方の風。

日常は変わらないのに、心の中の

配置だけが少しずつ変わってい

く。

第 10 話 写真



文化祭が近づく中、美咲のスマートフォンへ知らない番号から写真が届いた。中学生の美咲。隣には石井翔太。そして少し離れた場所で泣いている少女。

その日のことを思い返すと、健太は考えるより先に動く人間だっ

た。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

言葉にしないまま、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分

かったふりだけはしたくなかった。

誰にも見えないところで、三人ともまだ高校生だった。恋を知っているつもりで、実際には自分の欲望の名前すら知らない。だから傷つけ、傷つき、そのたびに相手のせいにしたくなった。

けれど同時に、人は秘密を持った瞬間に変わるのではない。秘密を守るために次の言葉を選んだ瞬間から、少しずつ変わっていくのだ。

少女の名は神崎玲奈。翔太の当時の恋人だった。

言葉にしないまま、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何

も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分かったふりだけはしたくなかった。

誰にも見えないところで、三人ともまだ高校生だった。恋を知っているつもりで、実際には自分の欲望の名前すら知らない。だから

傷つけ、傷つき、そのたびに相手のせいにしたくなった。

けれど同時に、人は秘密を持った瞬間に変わるのではない。秘密を守るために次の言葉を選んだ瞬間から、少しずつ変わっていくのだ。

それでも、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめること

があった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

＊

メッセージは短かった。『今度は私が見る番。』

誰にも見えないところで、三人ともまだ高校生だった。恋を知っ

ているつもりで、実際には自分の欲望の名前すら知らない。だから傷つけ、傷つき、そのたびに相手のせいにしたくなった。

けれど同時に、人は秘密を持った瞬間に変わるのではない。秘密を守るために次の言葉を選んだ瞬間から、少しずつ変わっていくのだ。

それでも、美咲は鏡を見る時、
自分の顔より表情を確かめること
があった。笑えているか。困って
見えるか。強すぎないか。その習
慣がいつから始まったのか、彼女
自身にも分からなかった。

翌日の光の中では、その言葉の
あとに残った沈黙は、返事よりも
雄弁だった。誰もが自分の正しさ

を持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

美咲は写真を削除しようとして、指を止めた。消しても過去は消えない。その当たり前のことが、初めて恐ろしく感じられた。

けれど同時に、人は秘密を持った瞬間に変わるのではない。秘密

を守るために次の言葉を選んだ瞬間から、少しずつ変わっていくのだ。

それでも、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

翌日の光の中では、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

帰り道になってから、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめ

き、電車の音、夕方の風。日常は
変わらないのに、心の中の配置だ
けが少しずつ変わっていく。

＊

裕太は亜紀から玲奈の名を聞いた。健太はまだ何も知らない。三人の情報量に差が生まれ、それぞれが別の美咲を見始めた。

それでも、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

翌日の光の中では、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁だった。誰もが自分の正しさ

を持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

帰り道になってから、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の配置だけが少しずつ変わっていく。

しばらくして、美咲は、人から
見られている自分と、自分だけが
知っている自分の間に薄い膜があ
るように感じていた。笑えば笑う
ほど、その膜はきれいに見える。
そして、きれいなものほど破れる
時の音は大きい。

夜、裕太は美咲へ電話した。遠回しな質問はしなかった。『神崎玲奈って、誰？』。

翌日の光の中では、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

帰り道になってから、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の配置だけが少しずつ変わっていく。

しばらくして、美咲は、人から見られている自分と、自分だけが知っている自分の間に薄い膜があ

るように感じていた。笑えば笑う
ほど、その膜はきれいに見える。
そして、きれいなもののほど破れる
時の音は大きい。

その日のことを思い返すと、健
太は考えるより先に動く人間だっ
た。だからこそ、立ち止まった時
の迷いは深かった。守りたいとい
う気持ちは本物だ。それでも、守

ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

＊

電話の向こうで美咲は黙った。
その沈黙こそ、裕太が初めて手にした明確な答えだった。

帰り道になってから、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめ

き、電車の音、夕方の風。日常は
変わらないのに、心の中の配置だ
けが少しずつ変わっていく。

しばらくして、美咲は、人から
見られている自分と、自分だけが
知っている自分の間に薄い膜があ
るように感じていた。笑えば笑う
ほど、その膜はきれいに見える。

そして、きれいなもののほど破れる
時の音は大きい。

その日のことを思い返すと、健
太は考えるより先に動く人間だっ
た。だからこそ、立ち止まった時
の迷いは深かった。守りたいとい
う気持ちは本物だ。それでも、守
ることが相手を見ないことに変わ
る瞬間がある。

言葉にしないまま、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分かったふりだけはしたくなかった。

第 11 話 奪った女、奪われた女



文化祭の日、神崎玲奈が学校へ現れた。美咲、健太、裕太、亜紀、玲奈。過去と現在が同じ部屋に集まった。

言葉にしないまま、人は秘密を持った瞬間に変わるのではない。

秘密を守るために次の言葉を選んだ瞬間から、少しずつ変わっていくのだ。

誰にも見えないところで、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始

まったのか、彼女自身にも分からなかった。

けれど同時に、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

それでも、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の配置だけが少しずつ変わっていく。

玲奈は昔のメッセージを見せた。『翔太くんが私を好きなのは、私のせいじゃないよ』『付き

合ってるからって、人の気持ちまでは縛れないでしょ』『彼女がいる男を奪うのって、そんなに悪いこと？』。

誰にも見えないところで、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始

まったのか、彼女自身にも分からなかった。

けれど同時に、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

それでも、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の配置だけが少しずつ変わっていく。

翌日の光の中では、美咲は、人から見られている自分と、自分だけが知っている自分の間に薄い膜

があるように感じていた。笑えば
笑うほど、その膜はきれいに見える。
そして、きれいなもののほど破
れる時の音は大きい。

＊

美咲は追い詰められ、『私だけ
が悪いの？』と叫んだ。玲奈は否
定した。自分にも、翔太にも、直
樹にも責任はある。ただ、美咲だ

けがずっと『私は何もしていな
い』と言ってきたのだと。

けれど同時に、その言葉のあと
に残った沈黙は、返事よりも雄弁
だった。誰もが自分の正しさを
持っている。けれど、三人の関係
では、正しさがいつも誰かを救う
とは限らなかった。

それでも、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の配置だけが少しずつ変わっていく。

翌日の光の中では、美咲は、人から見られている自分と、自分だけが知っている自分の間に薄い膜

があるように感じていた。笑えば
笑うほど、その膜はきれいに見え
る。そして、きれいなもののほど破
れる時の音は大きい。

帰り道になってから、健太は考
えるより先に動く人間だった。だ
からこそ、立ち止まった時の迷い
は深かった。守りたいという気持
ちは本物だ。それでも、守ること

が相手を見ないことに変わる瞬間がある。

裕太は『全部美咲が悪いとは思わない。でも何もしてないとも思わない』と言った。健太は、それでも今の美咲を信じると答えた。

それでも、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の

音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の配置だけが少しずつ変わっていく。

翌日の光の中では、美咲は、人から見られている自分と、自分だけが知っている自分の間に薄い膜があるように感じていた。笑えば笑うほど、その膜はきれいに見え

る。そして、きれいなもののほど破れる時の音は大きい。

帰り道になってから、健太は考えるより先に動く人間だった。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

しばらくして、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分かったふりだけはしたくなかった。

＊

美咲はその場で謝らなかった。
逃げるために謝りたくない。自分が何をしたのか考え、悪かったと

思えた時に謝る。その言葉に玲奈は初めて頷いた。

翌日の光の中では、美咲は、人から見られている自分と、自分だけが知っている自分の間に薄い膜があるように感じていた。笑えば笑うほど、その膜はきれいに見える。そして、きれいなものほど破れる時の音は大きい。

帰り道になってから、健太は考えるより先に動く人間だった。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

しばらくして、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言

えなくなることもある。それでも
彼は、分からないものを分かった
ふりだけはしたくなかった。

その日のことを思い返すと、三
人ともまだ高校生だった。恋を
知っているつもりで、実際には自
分の欲望の名前すら知らない。だ
から傷つけ、傷つき、そのたびに
相手のせいにしたくなった。

文化祭の夜、石井翔太から健太へ電話が入った。『美咲を守るなら、まず美咲から自分を守れ』。過去の男が、現在の男へ警告した。

帰り道になってから、健太は考えるより先に動く人間だった。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持

ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

しばらくして、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分かったふりだけはしたくなかった。

その日のことを思い返すと、三人ともまだ高校生だった。恋を知っているつもりで、実際には自分の欲望の名前すら知らない。だから傷つけ、傷つき、そのたびに相手のせいにしたくなった。

言葉にしないまま、人は秘密を持った瞬間に変わるのではない。秘密を守るために次の言葉を選ん

だ瞬間から、少しずつ変わっていくのだ。

＊

そして物語は、守ることと疑うことの境界へ進んでいった。

しばらくして、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも

彼は、分からないものを分かった
ふりだけはしたくなかった。

その日のことを思い返すと、三
人ともまだ高校生だった。恋を
知っているつもりで、実際には自
分の欲望の名前すら知らない。だ
から傷つけ、傷つき、そのたびに
相手のせいにしたくなった。

言葉にしないまま、人は秘密を
持った瞬間に変わるのではない。
秘密を守るために次の言葉を選ん
だ瞬間から、少しずつ変わってい
くのだ。

誰にも見えないところで、美咲
は鏡を見る時、自分の顔より表情
を確かめることがあった。笑えて
いるか。困って見えるか。強すぎ

ないか。その習慣がいつから始
まったのか、彼女自身にも分から
なかった。

第 12 話 守る男、疑う男



文化祭の翌朝、健太と裕太は久しぶりに二人だけで笑った。美咲を好きになる前の友情が、完全ではないにせよ戻り始めていた。

誰にも見えないところで、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわ

めき、電車の音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の配置だけが少しずつ変わっていく。

けれど同時に、美咲は、人から見られている自分と、自分だけが知っている自分の間に薄い膜があるように感じていた。笑えば笑うほど、その膜はきれいに見える。

そして、きれいなもののほど破れる
時の音は大きい。

それでも、健太は考えるより先に動く人間だった。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

翌日の光の中では、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分かったふりだけはしたくなかった。

美咲は玲奈と二人で会った。玲奈は、翔太との関係が美咲の登場以前から壊れかけていたことを認

めた。そして美咲への嫉妬も、自分の責任も認めた。

けれど同時に、美咲は、人から見られている自分と、自分だけが知っている自分の間に薄い膜があるように感じていた。笑えば笑うほど、その膜はきれいに見える。そして、きれいなものほど破れる時の音は大きい。

それでも、健太は考えるより先に動く人間だった。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

翌日の光の中では、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それ

でも彼は、分からないものを分か
かったふりだけはしたくなかつ
た。

帰り道になってから、三人とも
まだ高校生だった。恋を知ってい
るつもりで、実際には自分の欲望
の名前すら知らない。だから傷つ
け、傷つき、そのたびに相手のせ
いにしたくなった。

＊

『美咲は男を操りたいんじゃない
い。愛されてる証拠が欲しいん
じゃない？』。玲奈の言葉は、美
咲の家族の記憶を開いた。

それでも、健太は考えるより先
に動く人間だった。だからこそ、
立ち止まった時の迷いは深かつ
た。守りたいという気持ちは本物

だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

翌日の光の中では、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分かったふりだけはしたくなかった。

帰り道になってから、三人ともまだ高校生だった。恋を知っているつもりで、実際には自分の欲望の名前すら知らない。だから傷つけ、傷つき、そのたびに相手のせいにしたくなった。

しばらくして、人は秘密を持った瞬間に変わるのではない。秘密を守るために次の言葉を選んだ瞬

間から、少しずつ変わっていくのだ。

父は家にほとんどいなかった。

別の女がいた。それでも帰宅した日は美咲を可愛がった。優しさの翌日には、またいなくなった。美咲は人の好意が続くことを信じられなくなっていた。

翌日の光の中では、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分かったふりだけはしたくなかった。

帰り道になってから、三人ともまだ高校生だった。恋を知っているつもりで、実際には自分の欲望

の名前すら知らない。だから傷つけ、傷つき、そのたびに相手のせいにしたくなった。

しばらくして、人は秘密を持った瞬間に変わるのではない。秘密を守るために次の言葉を選んだ瞬間から、少しずつ変わっていくのだ。

その日のことを思い返すと、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

＊

一方、健太と裕太のもとへ翔太から写真が届く。高校入学後の美咲が、年上の男と二人で会っていた。男の名は桐生圭介。美咲に好意を持っていた人物だった。

帰り道になってから、三人ともまだ高校生だった。恋を知っているつもりで、実際には自分の欲望の名前すら知らない。だから傷つ

け、傷つき、そのたびに相手のせいにしたくなった。

しばらくして、人は秘密を持った瞬間に変わるのではない。秘密を守るために次の言葉を選んだ瞬間から、少しずつ変わっていくのだ。

その日のことを思い返すと、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表

情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

言葉にしないまま、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関

係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

美咲は圭介に会い、自分も相手の好意を知りながら会い続けたことを初めて認めた。『私も悪かった』。そして圭介へ謝った。

しばらくして、人は秘密を持った瞬間に変わるのではない。秘密を守るために次の言葉を選んだ瞬

間から、少しずつ変わっていくのだ。

その日のことを思い返すと、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

言葉にしないまま、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

誰にも見えないところで、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわ

めき、電車の音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の配置だけが少しずつ変わっていく。

＊

翌日、美咲は健太と裕太にも隠さず話した。健太は『守る』ことをやめ、間違いは間違いと言うと決めた。裕太は『疑う』ことをや

め、先に答えを決めず、その時の美咲を見ると決めた。

その日のことを思い返すと、美咲は鏡を見る時、自分の顔より表情を確かめることがあった。笑えているか。困って見えるか。強すぎないか。その習慣がいつから始まったのか、彼女自身にも分からなかった。

言葉にしないまま、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも雄弁だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

誰にも見えないところで、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわ

めき、電車の音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の配置だけが少しずつ変わっていく。

けれど同時に、美咲は、人から見られている自分と、自分だけが知っている自分の間に薄い膜があるように感じていた。笑えば笑うほど、その膜はきれいに見える。

そして、きれいなもののほど破れる
時の音は大きい。

三人で帰る夕暮れ、美咲へ知らない番号からメッセージが届いた。『やっと少し変わったね』

『でも、一番大事なことをまだ思い出していない』。

言葉にしないまま、その言葉のあとに残った沈黙は、返事よりも

雄弁だった。誰もが自分の正しさを持っている。けれど、三人の関係では、正しさがいつも誰かを救うとは限らなかった。

誰にも見えないところで、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の音、夕方の風。日常

は変わらないのに、心の中の配置
だけが少しずつ変わっていく。

けれど同時に、美咲は、人から
見られている自分と、自分だけが
知っている自分の間に薄い膜があ
るように感じていた。笑えば笑う
ほど、その膜はきれいに見える。
そして、きれいなものほど破れる
時の音は大きい。

それでも、健太は考えるより先に動く人間だった。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

＊

送り主を尋ねる美咲。返ってきた文字は『あなたの妹。』だった。

誰にも見えないところで、窓の外では、季節だけが何事もなかったように進んでいた。教室のざわめき、電車の音、夕方の風。日常は変わらないのに、心の中の配置だけが少しずつ変わっていく。

けれど同時に、美咲は、人から見られている自分と、自分だけが知っている自分の間に薄い膜があるように感じていた。笑えば笑うほど、その膜はきれいに見える。そして、きれいなものほど破れる時の音は大きい。

それでも、健太は考えるより先に動く人間だった。だからこそ、

立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

翌日の光の中では、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分

かったふりだけはしたくなかった。

一人っ子だと言っていた美咲は、青ざめながら呟いた。

『妹……いる』。

けれど同時に、美咲は、人から見られている自分と、自分だけが知っている自分の間に薄い膜があるように感じていた。笑えば笑う

ほど、その膜はきれいに見える。

そして、きれいなもののほど破れる
時の音は大きい。

それでも、健太は考えるより先に動く人間だった。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

翌日の光の中では、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それでも彼は、分からないものを分かったふりだけはしたくなかった。

帰り道になってから、三人ともまだ高校生だった。恋を知っているつもりで、実際には自分の欲望

の名前すら知らない。だから傷つけ、傷つき、そのたびに相手のせいにしたくなった。

＊

最後のメッセージが届く。『お姉ちゃん。今度は私を思い出して。』。白い微笑みのさらに奥に、家族の秘密が口を開いた。

それでも、健太は考えるより先に動く人間だった。だからこそ、立ち止まった時の迷いは深かった。守りたいという気持ちは本物だ。それでも、守ることが相手を見ないことに変わる瞬間がある。

翌日の光の中では、裕太は言葉を選ぶ癖があった。選びすぎて何も言えなくなることもある。それ

でも彼は、分からないものを分か
かったふりだけはしたくなかつ
た。

帰り道になってから、三人とも
まだ高校生だった。恋を知ってい
るつもりで、実際には自分の欲望
の名前すら知らない。だから傷つ
け、傷つき、そのたびに相手のせ
いにしたくなった。

しばらくして、人は秘密を持った瞬間に変わるのではない。秘密を守るために次の言葉を選んだ瞬間から、少しずつ変わっていくのだ。

書籍版あとがき

この物語で描きたかったのは、
単純な『悪女』ではありません。
誰かに好かれない、選ばれない、
捨てられたくない。そうした感情
が、本人にも気づかない形で他人
との関係を変えてしまう瞬間で
す。

美咲は嘘をつきます。健太は守ることで自分を正当化します。裕太は疑うことで真実に近づこうとします。玲奈も亜紀も、決して完全な被害者ではありません。誰もが白い顔と黒い本音を持っています。

第12話の最後で現れた『妹』は、美咲の恋愛観よりさらに深い

場所にある家族の記憶へ物語を導きます。ここまでが第一部。三人の恋の物語は、ここから『なぜ美咲は美咲になったのか』という物語へ変わっていきます。

『女とおんな。——白い微笑み、黒い本音——』を、ここまで読んでくださってありがとうございます。